

<sup>にっこうしゃさん</sup>  
「日光社参と宇都宮城」

## 日光社参とは？

江戸幕府の将軍が、徳川家康の墓所がある日光東照宮へお参りに行くことを「日光社参」といいます。これは単なるお墓参りと違い、将軍が大勢の大名・旗本を引き連れた行列を組んで大々的に実施し、将軍と幕府の権威を人々に示す重要な行事だったのです。たとえば、享保13（1728）年の吉宗<sup>よしむね</sup>の社参では、行列の人数が13万3千人に達しました。

日光社参は江戸時代を通じて19回実施されました。江戸時代の前半ほど多く、後半にはほとんど実施されていません。財政状況の悪化などで頻<sup>ひんぱん</sup>繁な実施は難しくなったようです。

江戸城を出た将軍の行列は、岩槻（埼玉県）・古河（茨城県）と宿泊して、3日目は宇都宮城に宿泊。宇都宮城と城下町は大変な混雑となりました。テレビ時代劇と違って、将軍が江戸の外に出て宿泊することはきわめてまれなことで、宇都宮城は全国的にも珍しい将軍の宿城としての役割を持っていたのです。（つづく）

「日光社参と宇都宮城」

日光社参は 19 回

日光社参は 19 回実施されていますが、そのうち 3 回は將軍の就任前と引退後だったので、現役の將軍の社参は 16 回でした。

実施回数は代によって相当ばらついています。2代秀忠は3回、3代家光は11回、4代家綱は2回、8代吉宗・10代家治・12代家慶が各1回で、それ以外の將軍は実施していません。

日光社参はあまりにも大規模な行事だったので、江戸時代の中期以降は、財政的な問題もあって実施が困難になりました。家光の11回は群を抜いて多いのですが、これは家光が祖父家康をとくに尊敬していたことと、幕府の力が充実していた時代だったからです。(つづく)

次ページに参考資料「日光社参一覧表」

## 日光社参一覧表

年 代	将 軍	宇都宮藩主	備 考	
1617(元和 3)年	徳川 秀忠	奥平 忠昌		
1619(元和 5)年		本多 正純		
1622(元和 8)年			宇都宮釣天井の伝説おこる	
1623(元和 9)年	徳川 家光	奥平 忠昌	将軍就任前に実施	
1625(寛永 2)年	徳川 家光			
1628(寛永 5)年				
1628(寛永 5)年	徳川 秀忠		将軍引退後に実施	
1629(寛永 6)年	徳川 家光			
1632(寛永 9)年				
1634(寛永11)年				
1636(寛永13)年				
1640(寛永17)年				
1642(寛永19)年				
1648(慶安 元)年				
1649(慶安 2)年	徳川 家綱		将軍就任前に実施	
1663(寛文 3)年	徳川 家綱			
1728(享保13)年	徳川 吉宗		戸田 忠真	
1776(安永 5)年	徳川 家治		戸田 忠寛	
1843(天保14)年	徳川 家慶	戸田 忠温	最後の日光社参	

「日光社参と宇都宮城」

## 天保の社参の実際

それでは、日光社参の状況を、最後となった天保<sup>てんぼう</sup>14（1843）年の12代将軍徳川家慶<sup>とくがわいえよし</sup>の例で見てください。

この社参は、安永<sup>あんえい</sup>5（1776）年の家治<sup>いえはる</sup>の社参以来、67年ぶりのものでした。

そのころ、幕府は内政・外交ともに問題が山積、権威がおおきくゆるいでいました。そこで、「天保の改革」の実行者である老中・水野忠邦<sup>みずのただくに</sup>が、幕府の威信を回復し、改革をやりやすくするために盛大に実行したと言われています。

準備はすでに前年から始まっています。天保13（1842）年2月に公式発表されましたが、実際の準備はもっと早く始まっていたのは言うまでもありません。

質素儉約を方針にしていた天保の改革の最中であつたので、社参の費用はできるだけ少なくする方針でしたが、実際は巨額の費用がかかりました。（つづく）

「日光社参と宇都宮城」

## 社参の準備

日光社参は、重要な行事なので準備も念入りです。

3月には幕府の役人が道の安全確認のため派遣され、危険箇所がないか巡視しています。また、将軍に同行する家来たちの人選と編成が次々と発表されました。将軍の宿城には前例どおり、岩槻・古河・宇都宮の各城があてられることに決まり、岩槻城主・大岡忠固<sup>ただかた</sup>、古河城主・土井利位<sup>としつら</sup>、そして宇都宮城主・戸田忠温<sup>ただはる</sup>は早速自分の城に戻って準備をはじめていきます。

5月には、将軍宿所の準備金として、岩槻城には3千両・古河城と宇都宮城にはそれぞれ5千両が幕府から交付されています。主に将軍の泊まる「御成御殿<sup>おなりごてん</sup>」の整備などに使用されたものと思われます。

利根川を渡る「房川<sup>ぼうせん</sup>の渡し」(埼玉県栗橋町と茨城県古河市の境付近)には五十艘以上の船を並べて臨時の船橋をかけました。その工事には3年以上の年月がかかったそうですが、日光社参が終われば取り壊してしまうものです。(つづく)

「日光社参と宇都宮城」

## 宿泊の割り振りと庶民

日光社参は、14万人もの大行列が移動するので、宿泊の割り振りも大仕事でした。宿割り専門の役人が任命され、たびたび道筋の調査に向かっています。

また、沿道の町や村ではすべての家屋の広さや間取りを図面にして提出するなど、徹底した調査が行われました。それをもとに、お供の人々の宿割りが決められたのです。

老中・水野忠邦も日光に足を運び、詳細な下見をしています。儀式の動作を詳しく予行したほか、老中みずからが、石段の苔こけを掃除することまで指示をしたそうです。

沿道の庶民に対してはお触れが出され、社参行列の迎え方として、家では女性や子供は軒下で、男性は土間で平伏へいぷくするように命じ、道端では並木より5～6間下がって女性を前に男性を後ろにして土下座するように、と詳細な指示を出しています。

天保14年になり社参が目前になると、留守居役るすいやくの任命・行列の予行などが続けざまに行われ、先発の大名が出発しました。(つづく)

「日光社参と宇都宮城」

## 行列の出発

天保 14 ( 1843 ) 年 4 月 12 日午後 10 時に、いよいよ社参行列の先頭が江戸城を出発しました。先頭は奏者番の安藤対馬守<sup>あんどうつしまのかみ</sup>、以後大名ごとに、4 月 13 日午前 0 時、午前 2 時、午前 4 時・・・と、ほぼ 2 時間おきに出発しました。

将軍のすぐ後に老中・水野忠邦が従っています。お供の大名だけでも 26 人、行列の総人数は 14 ~ 15 万人にも及び、行列の先頭が岩槻に達しても、最後尾はまだ江戸城にいたとも伝えられています。

将軍は、日光御成街道<sup>おなり</sup>を<sup>おなり</sup>通<sup>おなり</sup>って、その日は川口 ( 埼玉県川口市 ) で昼食、岩槻城 ( 岩槻市 ) で宿泊。翌 14 日は幸手<sup>さって</sup> ( 幸手市 ) で昼食、日光街道に入り、利根川を渡って古河城 ( 茨城県古河市 ) で宿泊。15 日には下野国 ( 栃木県 ) に入り、小金井 ( 国分寺町 ) の慈眼寺<sup>じげん</sup>で昼食。慈眼寺へは宇都宮城主・戸田忠温<sup>ただはる</sup>が出迎えに来ています。石橋 ( 石橋町 ) の開雲寺<sup>かいうん</sup>で小休止の後、雀宮を経て、宇都宮城下に向かいます。水野忠邦は岩槻以来先導を勤めていました。( つづく )

「日光社参と宇都宮城」

## 宇都宮城下の進路

天保 14 ( 1843 ) 年 4 月 15 日の夕刻 , 12 代将軍徳川家慶<sup>いえよし</sup>の行列は宇都宮城下にさしかかりました。すでに日暮れ時で , 行列は松明<sup>たいまつ</sup>を掲げて進みます。

進路は , 不動前から新町・熱木町<sup>ねぎ</sup>・材木町 ( 新町通り・蓬萊大黒通り<sup>ほうらい</sup>・材木町通り ) を通り , 新石町<sup>しんこく</sup> ( 裁判所前 ) で現在の大通りへ右折 , 池上町の張番木戸<sup>はりばんきど</sup>から宇都宮城内に入り , 大手門 ( 中央生涯学習センター付近 ) ・太鼓門 ( 中央小学校付近 ) ・二の丸門 ( NHK 宇都宮放送局付近 ) を経て , 二の丸にあった二の丸御殿へ入りました。城の西側から北側へ大回りして入ったのですが , 将軍たるもの , 近道だからといって , 南側の裏口から入城するわけにはいかなかったのでしょうか。

この頃にはすでに本丸内の御殿はなく , 将軍は二の丸御殿に宿泊しました。二の丸御殿は , 通常は宇都宮藩主が居住し , 藩の公式行事が行われる建物ですが , このときばかりは将軍に明け渡したのです。( つづく )



「日光社参と宇都宮城」

## 将軍の宿泊

二ノ丸御殿は藩の公式行事を行う「表<sup>おもて</sup>」と、藩主やその家族が住む「奥<sup>おく</sup>」の部分にわかれていましたが、将軍は「奥」のもっとも奥の部分に増設された宿館に泊まりました。これは日光社参に際して臨時に設けられるもので、社参が終わると取り壊されました。

江戸時代の前期は社参が頻繁<sup>ひんぱん</sup>だったので、本丸内に常設の御成御殿が設けられていたのですが、江戸時代の後期の頃には社参の回数も減ったため、このような形になったのです。

我が家を明け渡したのは、藩主だけではありません。宇都宮城下の武家屋敷・寺院・大きな民家なども軒並み徴用されて、将軍の随行者の宿舎になりました。住人は庭の片隅に仮屋を建てて寝たということです。

この日ばかりは、宇都宮城下は、日光社参の人々であふれかえっていたのです。

宇都宮藩主の戸田忠温、家老の戸田三左衛門<sup>さんざえもん</sup>と恒川七右衛門<sup>つねかわしちえもん</sup>は将軍に拝謁<sup>はいえつ</sup>して、刀や服をもらいました。

また、宇都宮領内の「孝子<sup>こうし</sup>・節婦<sup>せつぷ</sup>・篤行者<sup>とっこうしゃ</sup>」など、行いの良い人々に、お金やお米が与えられています。(つづく)

「日光社参と宇都宮城」

宇都宮城を出て日光へ

翌日の4月16日の朝、将軍は宇都宮城を出発し、入城時と同じ経路で城外へ出ました。

そして、現在の大通りを池上町から伝馬町へと進み、右折して日光街道（現在の清住町通り）へ入りました。

途中、野沢村（野沢町）で休憩、大沢宿（今市市大沢）で昼食、今市宿（今市市）・七里<sup>しちり</sup>（日光市）で休憩し、日光にはその日の夕方に到着しています。

日光では、17日に最も重要な行事である東照宮の参拝をしています。

18日には、日光のまちを散策しています。参拝がすんだあとということで、将軍も気分的にはかなり楽になっていたことでしょう。

その日に日光を出発し、江戸へ向かいました。宇都宮城にはその夜再度宿泊しています。往路のときと同様、宇都宮城下はお供の人々であふれたのは言うまでもありません。

19日に古河城、20日に岩槻城に宿泊、21日に江戸城に無事到着し、10日間にわたる日光社参の日程は終了しました。（つづく）

「日光社参と宇都宮城」

## 天保社参後の幕府

天保 14 (1843) 年の日光社参は終わりました。

宇都宮城は往復とも將軍の宿城となり、中継基地としての役割を充分に果たしました。

老中・水野忠邦は、みずのただくに衰えかけた江戸幕府の威信を回復するために、莫大な費用をかけて日光社参を実施したのですが、その後も内政・外交上の問題はますます大きくなっていきました。

忠邦自身もその波の中、失政の責任を問われるかたちで、社参のわずか 5 ヶ月後の 9 月 13 日に老中辞任に追い込まれ、天保の改革は挫折します。

幕府の威勢は回復することなく、天保社参の 10 年後のかえい嘉永 6 (1853) 年にはペリーが浦賀に来航し、翌年開国。25 年後の慶応 4 (1868) 年には幕府が倒れて明治維新を迎えたため、結局、天保 14 年が最後の日光社参となりました。

天保の日光社参は、江戸幕府が最後の輝きを見せた一大行事だったとも言えるでしょう。

(日光社参と宇都宮城 おわり)